

中学校学習指導要領保健体育科編の変遷に関する研究
A Study on the Historical Changes of the National Curriculum in P.E. of Japan
—Especially Through Analysis of National Curriculum in Junior High School—
1K03B126-1 田中一基

指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 寒川恒夫 先生

【研究の動機】

日本の教育は学習指導要領の「目標」「内容」に沿って行われている。その学習指導要領はこれまで数回改訂されている。特に中学体育においては1947年の学校体育指導要綱から6回（1951年、58年、69年、77年、89年、98年）の改訂が行われている。改訂の度に、体育の「目標」や「内容」は政治界や社会情勢に影響されて変わってきた。そして今、体育は何を教えるべき教科なのか、その存在意義が問われる事態となっている。

また、授業において指導法は生徒に大きな影響を及ぼす。指導方法次第で生徒の理解や技術習得に差が現れ、授業の雰囲気まで変わる。このことは教育実習を通して身に染みて感じた。

そこで、各時代の社会的背景と学習指導要領の「目標」「内容」の関係、指導方法を明らかにすることから、今後の体育教育の展望等を考察したいと考えるようになった。また、将来教員になった時の指導に役立てるため、これを本論文のテーマとした。

中学校に焦点をあてたのは、思春期である中学生の成長に体育の影響が大きいと考えたからである。

【研究の目的】

- ① 中学校学習指導要領がどのような時代背景の影響で改訂されてきたのかを明らかにする。
- ② 中学校学習指導要領の「目標」「内容」の変遷を検討し、各時代でどのような人物を育成することを目標としてきたのかを明らかにする。
- ③ 各時代でどのような指導方法が用いられていたのかを明らかにする。
- ④ 各時代の問題点や課題を踏まえ、今後の体育展望について考察する。

【研究の方法】

研究は文献購読によって行う。1947年の学校体育指導要綱から1998年の改訂まで計6回改訂された学習指導要領の変遷の歴史的研究を行う。また、改訂に関連する文献や、指導方法に関する文献を調べる。情報が不足しているところは、インターネット検索により情報収集をし、補足する。

【研究の要約】

○第一章 学校体育指導要綱と「生活体育」

第二次世界大戦後、日本の教育改革は連合国軍最高司令部（GHQ）主導のもと行われていく。戦前の軍国主義教育の払拭を目指したGHQの占領政策についてまとめ、日本の体育科教育の方向性を明確にした「学校体育指導要綱」が発行されることになった時代背景と経緯について述べる。

次に学校体育指導要綱と1951年の学習指導要領の目標と内容を中心にまとめ、どのような体育が目指されたのかを明らかにする。身体発達の目標が軽視され、子どもの日常の運動生活と体育との関連性を強調した生活目標が重視された「生活体育」についても述べる。

○第二章 法的拘束力を持った学習指導要領

学習指導要領は1958年改訂から国家基準として法的拘束力を持つこととなる。社会主義国の成立や冷戦などの国際情勢の変化とアメリカの対日政策の転換に関連させて、要領の拘束力強化への背景と経緯を述べる。

次に戦後初の国際大会への参加と高度経済成長期による国民生活の変化などを背景として、体育への要請が技能主義から体力主義に変化したことを目標・内容の変化とともに述べる。この時代に盛んに行われた業間体育などの体力づくり実践と体育嫌いについても述べていく。

○第三章 「楽しい体育」から現代まで

受験戦争による「切捨て教育」の反省、校内暴力の増加、生涯学習社会の理念の広がりを背景に、1977年学習指導要領からはゆとりある教育が目指されることとなった。ゆとり教育では体育授業時間が削減され、生涯スポーツを見据え「楽しさ」を重視した学校体育が行われることとなった。中学校における個性を重視した選択制授業の課題を述べる。最後に現行の学習指導要領について検討し、「学び方の学習」についてまとめる。

○結章

戦後、体育は政治界からの要請や社会情勢の影響を受け変化してきた。ここでは、これまでの体育を参考に、体育で保証されるべき能力は何なのかについて考察していく。また、「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」の答申を参考に、今後の体育について検討する。